遠州小夜中山
夜啼之石
孕婦男子音八

敵討之由來

上全

南葵文庫

特別
ル 3
3617
94

年遠州小夜中山夜啼の石原女の男子音八敵討の由来を
人皇九十九代光孝天皇の御宇貞観元年年三月のころ
武蔵国の郡、金ありと称をなんるに遠かに多摩なる
途中より武士二人つれたりとひくく二三歩同行せし彼男腰刀
むれ者潜殺されて夫婦なりしを男を殺のあり
そはまことなるを無惨なりて彼乃子女を無辜の斬殺
遁ふ有りを石やおれ松をそ斬くるの人の妻一歩離石
家屋松とく今ま有子人ホ怪人で見をとるに斬殺されし女乃
相内より有相の男子生せり時あれ殺せ中山の新世音菩薩
不便あれ名乃人の人と孤子のひてを子を出元上観をとりて
書を持入り二三歩のころよりいたをこそ子をもたく成

成おしと名をつけ八とそ名乃る孤子ホ名八天性孝心ふくしと
敵を思母とのを殺人を討人を思ひつ書を天
の下を家と定めそ母を殺せ敵一旦書を敵を討人を思ひつ書を天
ほ命との者の仲ホ助りて給ば一二十八歳乃齢を経こうの
六十有除の大男刀を持ち来て廣今との源の神号をそ
名乃なるこも山の大ホ力を持るとそを殺を同べかのおとこ
仇なくるとさ沢経婦を斬一本をありしを殺る者八
再性仲ホ吹を泡鬼ホ面もなる死亡母を敵成けるこ脱ぶ本
解をそ偏ホ仏神擁護の故と難有く敵かむろく亡母の
事を名をつけ生ぶ敵大ホ地ろく称ホ人を生どものなる
乃死母うあらざるぶ力をぬな死あうを生くむひとりさんどる

遠州小夜中山
無間之鐘
大沢兵庫之事
川井宗仲
全
中

母八年煩ひ、又佛神かけ願ゆとやうなく安の獻と
新のろしと年癖を祈一ぬ番くら廣縁死の形態うこと
より小夜中山子生長新世音菩薩と号なる故ハ
世人歯石の服を初き子ごもの利益成ハ名なく名人こなを
信ハ脳肉の子よ信りなくく安産出生ハ不安二病息災ハ孫
数ハ昌を家くんとの所作ぐべく祈願むなるのなり
よるの死のハよりきて人命ハ不によるの死ハ松のそとこ雨ハ者八
が母きりとうさきく今回せ死の傳ハ松ハ拾ハ名ハ果て
名年ハけり山ハよりあの方の谷川のあを水くかの
者八を出ハ上く見ハ名ハ今者ハ出と名ハ今者ハ出と

是大伴兵庫の由来を聞小夜中より忽空に写る山水の間山
が白浪ケ嶽とも又の称を箸音を弄するの頂上の井戸の淵の名
申せし先の修験者を示して白黒のごとく夜叉の池ケ嶽に至り千尋
あるが故に雷り鳴しと云へり雉子の七魂たる一切の霊魂となし日本
三種の内三昧の護摩上の法を勤めて魂を封し宮より満足する
護を受て死後魂を擁護して而して後蔵執して皆徳目立に至りて
現世後の徳なりと又も未来永劫無量地獄へ堕て七難不受
らるを信じ猶更に彼井戸へ食物を投入して公然と称する
元山の修験者に成して仏の云ならびより井戸に仲侍従流信との人心山へ
集り衛あて其の上に序をのりかけ幕布打廻し四方の風を遮断
楽席を設る事の由に家中一統の推挙する者ありて気色悦ばずと

兵ありて兵大伴兵庫か邪道を志す者のたとへ其の企み上なりと
おもへば野外の事なるを探偵に見しける兵庫其の許を
らず其をしらざるも我身にあらく心の恨を抱き其の様を持て
含み居りしおりからも此頃は大概いつもの事にて仲間も傾んとすなるかへる者を
父に従りて宗仲が不順をも押伏せんとひそかに申し含めおきたる其の余が
眼を掠め坂の外に道を志す者あり其の上幕中へ入らんと前なの
るなれども宗仲猶是を知りて和睦に服させんと思ひて企る者を
捕て其恨を晴さんと兵武士のたのもしきものは其様にしてさせんと思ひ
罷せんるを聞くもあるならし其時に者をも捕て今頃獄させん思ひ入
さて来るべしといひて其世どもとて聞て出たる一念の者ばかり
のいさかひの及ぶ阿鼻地獄へ落つるともこの者の恨をはらさで

遠州小夜中山
化鳥飛之雛子
上杉三位卿
退治之由來
全
下

あくびれと倚て奥人の答なり又ハ彼山ハ宅中を取玉ふを脈しく
書るれ陳を井戸の底へ埋めなり其屁宅中へ陳をこうづ
求もどの山の内の身体是かふー死と無念て余り霊會と嫉め
陳の霊が分とごろとの者わしじと勝ふ鉄炮せんとする時
雅に小磨団執やきく此山の守護神ハ尖子一寸坊大権現
郡まぎのひ其磨をひつけつゝ施くたる霊磨ハ投すとのよ
神罷の徳こそおそろしき是翻陳を埋めよる井戸の
頭ハ榛を建てさしたまふ生ゑより来世とも朽もせで
井戸の水にすゝり又側に地獄究といふ大盤石れ岩
窟今にあり　其こ此のかほもその有る死をすゝろくやと
おのへ乃つちましぐうつめんと倚ハりのあり

後宇多院の御宇弘安年中遠州小夜中山に鵺神あらはれ又
かの雉子といふ化鳥住て近里近郷の人民を悩し一夜に[illegible]
見るもの忽ち病を生じあるひは死するもの其数をしらず
往来の旅人も路をふさぎ通路絶んとするによりて
[illegible]朝廷より化鳥退治として
一条院殿上人三位[illegible]勅令を蒙り[illegible]
らふ者を召供し小夜の中山へ下向ある中山の四方なる
[illegible]とらふ長者ありけるが此所に宿の旅籠となさまたげの
[illegible]あるひは化しる神変不思議にて
かし[illegible]不住なるといふものを知りして見せし姿を
変じあつみとなりけれど消どもふかんくずある時は目

よれ女と化し往来の人をなやましなどして深山幽谷へ逃行の成
是ちと面猿のごとく東西南北を飛行あるひは猫
九峰鳴の声は鵺[illegible]
とんをとぞて年月を経りかれはつましての山伽[illegible]
姫白菊といへる元来中嶽の中山[illegible]
容顔美麗にして深窓に育まれ人[illegible]
器用しく其中の若[illegible]ゆかしく手本の[illegible]
[illegible]深くうせ院光同[illegible]
[illegible]有る日の[illegible]化鳥[illegible]
[illegible]是を見[illegible]
[illegible]来を[illegible]源八[illegible]
[illegible]中より[illegible]文をめって[illegible]

あるに紛かくらい雛子まの似て羽翼へとゞく及なり瞬に
あく路傍の如し手前をおもしれなり云れ〳〵なし此里慕き
王鏡姫（中）上臈らんと刎舞る山より源八を伴ひ貴賤足宿
狩に白菊姫是を見ぜんと三位公の御後をなひ下た狩かれ
素二八にたらぬ女の身をやせんかたと思い嘆月日をおくる
その中より親の御さぬ悲懐となりしあが不行徳をなげき入て所ら
まで下と登る山の流に物数へ通りし橘ヶ淵と云淵あり此淵
にて我宿僧沉めんと神やたる石をふところ中へ入ていのれり
その時の石成者ありて今菊石を橘ヶ淵を若有庵と
云て中山の辺大廉と云ふ不ま今に有る渡上杖三位公下
向ありて此所にて病死せられ今に菊川の田も此旁跡あり也え